巨乳美女人妻
中出し

短編エロ小説

私のお腹にいるの
あなたの子よ・・

美人で巨乳な妻の友人（はるかさん）の家に押し入って中出ししたら妊娠してしまったので再度中出ししてみた

俺は小林しんじ、今年34歳の既婚男性であり医薬品メーカーに勤める会社員でもある

俺は大学卒業を機に当時の彼女である愛する妻と若くして結婚した

妻のことは大好きだ

毎週土日の休みは買い物や旅行に出かけたりと順風満帆な夫婦生活を送っている

しかし、妻のみさきには一つ欠点がある

貧乳だ、妻のみさきは貧乳なのだ

というかまな板同然でまったく揉む胸がない

俺は巨乳でエロい女が大好きだ

毎日、会社や街中で豊満なボディの女を見かけると、俺のチンコは我慢汁一杯でどうにかなりそうになる

「ああ・・でかい胸が揉みてえ・・」

巨乳を揉みたいのに揉めない日々を
どうにかしたい

そう思っていた矢先、いいことを思いついた

「みさきの友達って
エロい人妻が多いよな・・・」

「人妻ならおっぱいくらい触っても
問題ないか・・・」

「てか人妻なら中出ししても問題ない？・・・」

「とりあえずみさきの大学からの親友、はるか
さんの家に押し入って犯してみるか・・・」

「・・・なんかいざ実行するとなると・・・」

「・・・すげえ興奮してきたな・・・」

「俺のチンコでイカせまくってやるよ」

美人で巨乳な妻の友人（はるかさん）の家に押し入って中出ししたら妊娠してしまったので再度中出ししてみた

企画コンセプト設計：ももバニラ
脚本イラスト制作：いちごチョコ
制作進行管理：めろんミント

「ピンポーン」

「ガチャ」

「あら、みさきの旦那さんじゃない」

「どうしたんですか？・・・」

「なんか、いい女抱きたいなあ～って」

「ちょっと、何冗談言ってるんですか」

「すまんすまん」
「とりあえずお邪魔しますわ」
「ま、まあ別にいいですけど・・・」
「みさきには言ってきたんですか？」
「他の女口説くのに伝えないでしょ笑」
「もうほんとに何なの・・・みさきに言いますよ」
「私だって旦那いるんだから」

「まあまあ、落ち着いてよはるかさん」
「さっきのは冗談に決まってるじゃん」
「で、ですよね・・・急にあんなこと言われたからびっくりしちゃって」
「でも本当にいきなりしんじさんが来るなんてどうしたんですか？」
「いやあ、なんつーか・・・最近みさきとセックスレスなんだよね」

「え、やっぱりそうなんですか？」
「みさきもこの前同じこと言ってましたよ」
「何か原因とか心当たりあるんですか？」
「まあ、マンネリだろうね。お互い男と女として見れなくなってきた感じかな」
「そうだったんですね・・・でもけっこうそういう夫婦多いって聞きますよ」

「結婚すんの早すぎたかなあ～」
「もっといろんな女の子と遊べばよかったわ」
「そんなこと言わないでください、みさきが聞いたら悲しみますよ」
「大学卒業してすぐに結婚なんて羨ましいですよ、私なんて32歳で5年付き合った彼氏に振られて、、そこから婚活でしたから」
「でもはるかさん美人だし余裕だったでしょ」

「全然そんなことないですよ・・・もう失敗できないってプレッシャーあったし、寄ってくる男みんな身体目当てだし・・・いいなあって思った男性からも一晩だけの関係みたいな扱い受けるし。。。」

「それははるかさんが魅力的だからだよ、でも結局ちゃんと旦那さんゲットしてるじゃん」

「うん、正直妥協した面は否めないけど」

「え、何、旦那さんに不満でもあるわけ？」
「聞くよ、言ってごらん」
「うーん、絶対内緒ですよ・・・うちの旦那、まだ新婚なのに全然抱いてくれないんです・・・すごく優しいし、いい人なんですけど」
「まじかい、こんないい女嫁にもらって、、俺なら毎日抱きますわ笑」

「ちょっと、冗談でもそんなこと言っちゃだめですよ笑、でも嬉しい・・」
「私だって34だけど、まだまだ女でいたいの」
「結婚するならしんじさんみたいな男らしい人が良かったな」
「今からでも遅くないかもよ、俺なら今日だけでも女でいさせてあげられるよ」
「え・・でもそんなのまずいですよ・・」

「みさきにだって悪いし・・、あっ、ちょっと喉乾きません？　お茶入れてきますね」

（うまくはぐらかされたか・・・・、でも欲求不満そうだし押せばいけるかもな、てか睡眠薬もってきてるしお茶に混ぜて飲ませるか）

「お待たせしました、最高級のお茶ですよ笑」

「しんじさんのはジャスミンティーです」

「お、あざす、てかはるかさん、髪めっちゃ綺麗だね、後ろ姿とか特にいい女感出てるんじゃない？」

「そんなに褒めても何も出ませんよ笑」

「とりあえず後ろ向いてみてよ」

「え、まあいいですけど」

（サーッ・・・睡眠薬投入完了っと）

（数分経過）

「なんだかたくさんしゃべったら眠くなってきちゃいました」

「おう、大丈夫か？　全然横になってもらってかまわないよ（おしおし薬が効いてきたか）」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

「しんじさん、お茶になんか入れました？」
「なんかありえないくらい眠くって・・・」
「何言ってるの、お茶入れたのはるかさん
でしょ笑」
「そ、そうだよね・・・（バタッ！）」
「おし、ようやく眠ったみたいだな」
「好き放題犯しまくるか」

「うっわ、めっちゃ興奮してきた」
「このえっろい女体になんでもしていいのか」
「てかやっぱ巨乳だな、胸でっか」
「みさきの貧乳じゃあ満足できなかったんだよな、女は絶対巨乳に限るな、とりあえず念願の巨乳で楽しませてもらうか・・・」

（揉み揉み）

「うんっ・・あっ・・・」

「あれ、もしかして感じてる？　えっろ、てかはるかさん胸だけじゃなく顔もすっげえかわいいな、まじ勃起してきた、次はそのプルプルの唇奪ってやるかな」

（チュパッ、チュルチュル、チューッ）

「はあ、やわらけえ。。初物の女はたまんねえな、そそるぜ」

「う、うっ！」「あん・・・」

「寝てんのに反応あんのたまんねえな、ほんとに男を悦ばすために生まれてきたような女やな、次は服脱がしてみるか」

「うわ・・肌つるつるだわ、これが34歳の女の身体かよ。。」

（さわさわ、腹部を撫でまわす）

「んんっ・・・」

「どう攻めようか、このままここで終わらすのはもったいない、ベッドに連れていくか」
「しっかし、こんな経験またいつできるかわからん、しっかりスマホで撮影しておくか」
（パシャ、パシャ）
「うひょー、これで当分オナニーに困らんぜ」
「じゃあ、寝室に運びますかな」

（ばさっ！）

「う・・んん・・、あれ、しんじさん？」

「なんで寝室に？　っつ・・なんだか頭がぼーっとするみたい」

「（やべっ、起きたか）はるかさん疲れてるみたいだからゆっくり寝てな」

「うん・・ありがとう・・・（すや・・）」

「あぶねえ、また起きる前にさっさと楽しむか。」「しっかし綺麗でツルスベな脚もたまらん・・・（さわさわ）ハアハア・・・」

「一生触ってられるぜ。。てかスカートの中どうなってるんだ？・・・手入れてさすってみるか・・・（さすさす）」

「あっ・・ん」

「寝ながら感じてんじゃねえか、変態女め」

「スカート邪魔だな、脱がすか・・うっわw
太ももエロすぎて草、舐めちゃおーっと」

（れろれろ・・ちゅぱちゅぱ・・たら～）

「たまんねえぜこの女、まんこも撫でまわして
みるか・・（ぬちゃぬちゃ）うひゃー、濡れ
てんじゃねえかよ」

「んん・・あん・・」